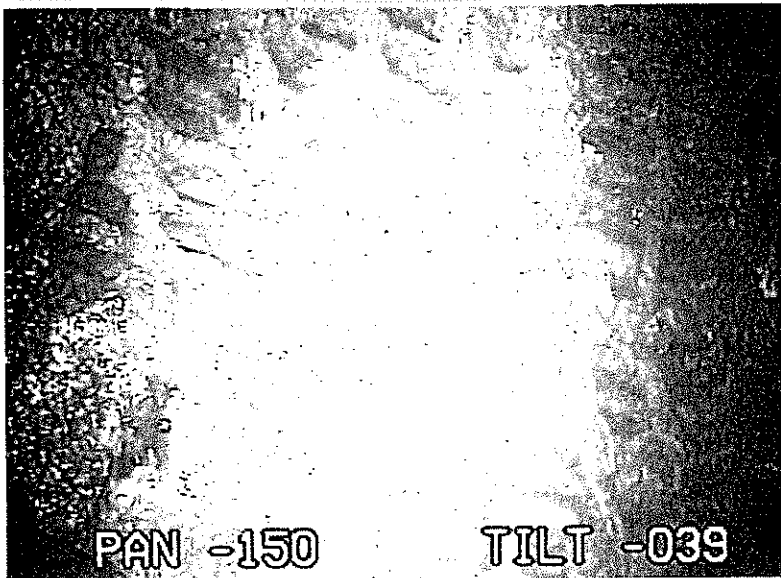
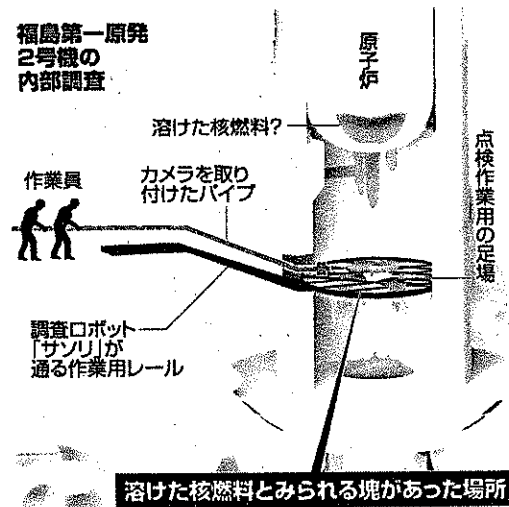


原子炉容器下に溶融燃料か



初めて撮影された東京電力福島第一原発2号機の圧力容器の直下の様子。格子状の作業用の足場に、溶け落ちた核燃料とみられる塊がこびりついている=東京電力提供

福島第一2号機 黒い塊



東京電力は30日、メルトダウン(炉心溶融)した福島第一原発2号機の原子炉圧力容器の直下を遠隔カメラで調査し、溶け落ちた核燃料(燃料)の可能性がある黒い塊を発見した。2月に投入するロボットで放射線量を測り、核燃料が確かめる方針。核燃料の状態はこれまで、シミュレーションや間接的な観測でしか推測できておらず、事故から約6年経っても直接確認した例はなかった。東電は今後、核燃料を取り出す方針だが、困難が予想される。東電はこの日、カメラを付けたパイプを格納容器に開けた穴から差し込み、圧力容器の下部まで近づけ

廃炉困難 浮き彫り
東電は宇宙線を利用した昨年の透視調査で、2号機の核燃料は大部分が原子炉圧力容器の中に残っていると推定していた。圧力容器直下にカメラを入れても、溶け落ちた核燃料が見える可能性は低いとみていた。だが、カメラの視野には、溶けた核燃料のような塊がそこかしこに飛び散っ

た。圧力容器の直下にある作業用の足場の隙間や鋼材の上などにへばりついた黒っぽい塊が映っていた。東電幹部は「ロボットで放射線量などを測ってみないと、現時点では言い切れないと一言を述べた。今後、核燃料の詳しい大きさや硬さ、広がりなどを調べる方針だ。(富田洗平、川原亨子)

線量を測り、核燃料が確かめる方針。核燃料の状態はこれまで、シミュレーションや間接的な観測でしか推測できておらず、事故から約6年経っても直接確認した例はなかった。東電は今後、核燃料を取り出す方針だが、困難が予想される。東電はこの日、カメラを付けたパイプを格納容器に開けた穴から差し込み、圧力容器の下部まで近づけ

ている様子が浮かび上がった。そこから分かることは、これからの核燃料取り出しや廃炉の困難さだ。溶けた核燃料が原子炉の外に出た事故は、これまで旧ソ連のチェルノブイリ原発事故以外はない。チェルノブイリ原発では、事故後30年が経過した今も、取り出しに着手していない。東電などは、2018年度に溶けた核燃料の取り出し方法を決め、21年にも着

手するとしている。だが、事故から約6年で、核燃料かもしれない姿の一部が見えただけだ。核燃料や、核燃料がこびりついた金属をどう切り出すのか。作業員の被曝をどう抑えるのか。取り出した燃料をどこに保管し、いつ処分するのか。3基がメルトダウンした世界でも例のない廃炉作業は、まだ、何一つ決まっていない。(東山正宣)

手するとしている。だが、事故から約6年で、核燃料かもしれない姿の一部が見えただけだ。核燃料や、核燃料がこびりついた金属をどう切り出すのか。作業員の被曝をどう抑えるのか。取り出した燃料をどこに保管し、いつ処分するのか。3基がメルトダウンした世界でも例のない廃炉作業は、まだ、何一つ決まっていない。(東山正宣)

手するとしている。だが、事故から約6年で、核燃料かもしれない姿の一部が見えただけだ。核燃料や、核燃料がこびりついた金属をどう切り出すのか。作業員の被曝をどう抑えるのか。取り出した燃料をどこに保管し、いつ処分するのか。3基がメルトダウンした世界でも例のない廃炉作業は、まだ、何一つ決まっていない。(東山正宣)